

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻ジュネーブ研修の報告

著者	兒玉 慎平, 稲留 直子, 丸谷 美紀
雑誌名	鹿児島大学医学部保健学科紀要=Bulletin of the School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
巻	26
号	1
ページ	59-65
別言語のタイトル	Report on the Kagoshima University student overseas trainnig project in Geneva
URL	http://hdl.handle.net/10232/26667

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻ジュネーブ研修の報告

兒玉 慎平¹⁾, 稲留 直子¹⁾, 丸谷 美紀¹⁾

要旨 平成26年度の3年生を対象とした公衆衛生看護管理論 に関わる課外活動としてスイス・ジュネーブに集中する公衆衛生看護に関わる国際機関の視察研修を行った。国際赤十字・赤新月社連盟 (IFRC), 国際看護師協会 (ICN), WHO 本部の訪問, ジュネーブ市内のフィールドワークを行い, 公衆衛生看護に関わる世界情勢の実際についての理解を深めた。各訪問機関において, 現地スタッフと交流し機関の概要を理解するだけでなく, 公衆衛生看護の視点から見た各機関の役割機能についても学習することができ, 学生の視野の拡大と国際感覚の涵養に効果があった。また, 英語に堪能な学生の活用や, 現地日本人スタッフとの交流により, 研修の効果が向上する可能性が示唆された。

キーワード: 公衆衛生看護, 国際交流, IFRC, ICN, WHO

1. はじめに

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻では, ディプロマ・ポリシーに「看護の問題をグローバルな視野でとらえ, 幅広く人々の健康に貢献できる」を掲げ, 保健学科設置の理念に示されているような「国際的感覚を持ち, 交際的に貢献できる人材」を育てることを目指している。また, 平成23年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正により, 公衆衛生学分野を含めた看護職教育の充実が全国的に図られる中, 地域看護・看護情報学講座でも平成24年度の入学生 (平成26年度における3年次学生) から保健師教育の新カリキュラムを導入した。新カリキュラムではこれまでの教育の方向性を更に延長し, 世界の中における自分の地域の位置づけ, 地域の中における自分の立ち位置を理解したうえで, 足元の地域へ当事者的に関わる感覚, すなわち「鳥の目」と「虫の目」を併せ持つグローバルな感覚を身につけた, 地域に根ざす看護専門職, 保健師の養成を目指している。

この目的に向けて, 地域看護・看護情報学講座が担当する新しい講義科目のひとつである「公衆衛生看護管理論」では, 世界における母子保健, 成人高齢者保健,

感染症対策等の実際を学ぶことで, 国際感覚など俯瞰的な視点を養うことを目標に掲げている。この目標を達成するために, 資料による学習だけでなく, 広く世界の保健活動・看護活動の実際を見聞することは学生の視野を広げ国際感覚の涵養に繋がると考え, 平成26年度の公衆衛生看護管理論 に関わる課外活動としてスイス・ジュネーブに集中する公衆衛生看護に関わる国際機関の視察研修を企画した。

具体的には, 平成26年3月16日から3月21日の6日間にかけて, 国際赤十字・赤新月社連盟, 国際看護師協会, WHO 本部を訪問し, 公衆衛生看護に関わる世界情勢の実際についての研修を行った。本稿においては, 研修の内容と学生の学習効果についてを中心に報告を行う。

2. 研修参加学生の選考

指導体制, 学生間グループ・ダイナミクスを考慮して学生の参加人数は概ね6名程度とし, 15名の希望者に対して選考試験を実施した。

選考試験の内容はレポートと集団面接である。集団面接の方法は, 研修参加への熱意と積極性を評価し, かつ

¹⁾鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系 地域看護・看護情報学講座
連絡先: 兒玉慎平
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
Tel/fax 099-275-6794
e-mail: kodama@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

国際機関における短期間の研修の効果を最大限発揮するために必要と考えられる、慣れない状況での自分の意見の伝達能力、リーダーシップ、フォロワーシップなどの判定のため、テーマを設定した討論形式とした。選考の結果、最終的に研修に参加する学生は男子学生1名、女子学生6名の計7名となった。

出発前に定期的なグループワークを実施して訪問先機関についての事前学習を行い、質問項目などを準備して研修に臨んだ。また、フィールドワークの時間のスケジュールなどについても学生と協議のうえで決定し、学生の自主性を最大限発揮できるよう研修の企画段階からの参画を促した。

3. 研修の実際

研修の大まかなスケジュールは表1に示す通りである。以下、スケジュールに沿って各視察研修の概略を記述する。

1) 国際赤十字・赤新月社連盟 訪問

国際赤十字・赤新月社連盟 (IFRC : International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies, または連盟と略されることも) は、各国の赤十字社・赤新月社の国際的な連合体であり、スイスのジュネーブに事務局と世界65カ国に代表部を置いている、独立した人道機関である。IFRC, 赤十字国際委員会 (ICRC : International Committee of the Red Cross), 189カ国の各国赤十字社の3つからなる国際赤十字・赤新月運動の中でも、ICRCが各国政府から拠出される資金に基づき世界中の紛争地

表1 2015国際機関視察研修 (WHO本部他)

	時間	内容
3月16日 (月)	～19:00	ジュネーブ到着
3月17日 (火)	終日	国際赤十字赤新月連盟 (IFRC) 視察 ・全体活動の説明 ・災害時看護活動講義 ・地域保健分野活動講義
3月18日 (水)	10:00～12:00	国際看護師協会 (ICN) 視察 ・協会の概要説明 ・具体的な活動内容と協会の役割について
	午後	ジュネーブ市内フィールドワーク
3月19日 (木)	終日	世界保健機構 (WHO) 視察 ・全体活動及び概要の説明 ・施設内見学 ・北海道大学視察団との意見交換 ・結核対策分野の専門家による講義
3月20日 (金)	9:10	スイス出国
3月21日 (土)	9:10	福岡空港着

での人道的援助を独力で行うのに対して、IFRCは各国赤十字社が集めた募金に基づき、自然災害などへの対応を中心に各国各社への情報提供や、技術的・資金的援助を行っているのが特徴である。具体的には、自然災害が実際に起きたときの緊急支援 (医療チームの派遣、救援物資の配布) や復興支援 (住宅・病院再建、救援物資の配布) のみならず、常日頃からの備えのための開発協力支援として、(1) 防災知識の普及、物資の備蓄、(2) 保健・衛生知識の普及、(3) ファーストエイド (応急処置) の訓練、(4) 各国赤十字社の規模・能力強化などを行っている。これらの活動は、医療専門職が担うべき災害時及び平常時の健康危機管理活動、特に行政保健師などが担う初期段階におけるニーズ把握と具体的援助活動における各種連携・調整機能、平常時の体制作りのまさに国際版とすることができる。

また近年のIFRCの具体的援助内容として、生殖・母性・新生児・児童保健の分野 (RMNCH : Reproductive, Maternal, Newborn and Child Health) を例に、地域住民参加型の保健事業 (CBHFA : Community Based Health and First Aid) の紹介があった (写真1)。CBHFAは健康への課題に住民自らが気づき、自分たちの力で克服できるように、赤十字からボランティア、ボランティアから住民へと保健・衛生の知識を広げていくことを目指した活動である。国際的な災害援助活動の現場においても、地域それぞれの特徴を活かして地域住民の力を引き出しながら、さまざまな健康課題への解決策を見出すと言った、日本における保健師の専門性ともいえる活動が重要であることが示される内容であった。

IFRCのジュネーブ事務局には3名の日本人が日本赤十字社から出向して働いており、そのうち2名が日本政府から拠出資金による事業を担当し、1名が2期目の連盟会長に就任中の近衛忠輝氏のスペシャリストアドバイザー業務を行っていた。今回の研修では最初にIFRCの概要について、日本政府事業担当の石橋奈緒子氏より日本語



写真1 Community Health and Innovation Unitの医師による講義 (IFRC)



写真2 石橋奈緒子氏（前列1番左）と一緒に（IFRC）

での説明があった後に、英語による現地スタッフの講義や交流が行われた（写真2）。

2) 国際看護師協会 訪問

国際看護師協会（ICN：International Council of Nurses）は、130以上の国の1600万人以上の看護師を代表する、看護師協会から成る組織である。ICNは、看護師のために看護師によって運営されており、全ての人々への質の高い看護、堅実な世界的保健政策、および、看護の知識の発展を保障するために努めており、また、尊敬されるべき看護専門職と有能な看護の人材が世界的に充足されるべく活動している。現在 Judith Shamian 会長、David Benton CEOのもと、3人の常勤の看護スタッフ（ICN ナース・コンサルタント）がおり、今回の研修ではその一人である草野由紀子氏から話をお聞きした（写真3）。具体的な活動分野として、専門看護実践（Professional Practice）、社会経済福祉（Socio-Economic Welfare）、看護規制（Regulation）、があり、特に様々なレベルにおけるアドボカシー（Advocacy：唱道、代弁、主張）が重要な役割となっている。専門看護実践では、Mobile Libraryの提供（写真4）や非感染性疾患（NCDs：Non-



写真3 草野由紀子氏（後列左から3番目）と一緒に（ICN）



写真4 Nursing Mobile Library（ICN）

Communicable Diseases）などの具体的疾患に対する教育活動だけではなく、職場の安全などに関して政府との交渉能力を備えた国レベルでのリーダーを育てる事業などを行っている。社会経済福祉では、ヘルスプロモーションや予防分野の重要性が増してきており、例えば国際的な Global Action Plan を策定する際などに看護の役割について明記することで、各国での看護活動や看護職の政府との交渉をしやすくする役割を担っている。また看護規制では、その国にあった看護制度や資格についての助言や交渉を行っている。

最後に草野氏から、「看護師はひとりひとりがリーダーでありコラボレーターでなければならない。看護師は臨床での看護活動を行うだけでなくその経験を保健政策につなげていく責任があり、またここで言う保健政策とは国レベルの大きなものだけを言うのではなく、例えば病棟の問題点を改善していくと言ったより草の根レベルの活動を含む」と言ったお話があり、保健師の業務の特徴のひとつである政策立案などの管理活動が、看護に求められる様々なレベルの管理活動のひとつであり、その機能は看護全体において重要な役割を担っていることが国際看護の立場から示唆される結果となった（写真5）。



写真5 オリエンテーション風景（ICN）

3) WHO 本部 訪問

WHOは1948年に設立された健康に関する国際連合の専門機関である。194の加盟国が、加盟国の保健大臣によって構成される世界保健総会において、保健分野の有識者から成る執行理事会の助言と事務局のサポートのもと、国際保健の優先課題及び救命・保健の向上のために必要な対策を決定している。WHOの主要な機能としては、リーダーシップの発揮、規範と基準の設定、技術支援・能力開発支援、研究課題の形成、政策オプションの明確化、健康動向の把握とモニタリングなどがある。またWHOの主要な分野としては感染症、非感染性疾病(NCDs)、生涯にわたる健康、保健システム、危機管理・サーベイランスと対応などがあり、以前は感染症が主要な分野であったが、現在は非感染性疾病(NCDs)へシフトしてきている。スイス・ジュネーブにある本部の他、6つの地域事務局、151の国事務所が存在する。現在Margaret Chan事務局長のもとに7500人の職員(うち日本人は32名)が在籍している。今回の研修では、厚生労働省から出向中の木庭愛氏に調整を担当していただき、ちょうど同時期にジュネーブを訪問していた北海道大学の教養科目選択学生からなる視察団と合同で研修を実施した(写真6)。

事前の調整で感染症対策を中心とした研修をお願いしており、また滞在中エボラ出血熱のアウトブレイクがアフリカで進行中であったため、今回の研修における各論の内容は、主としてエボラ出血熱対策に関する内容と、結核対策(End-TB-Strategy)に関するものであった。まさに進行中のエボラ出血熱の感染情報が集約されている対策本部を実際に見学し、会議の様子を垣間見ることができたが、とかく対岸の火事と感じがちな国際的な感染症の発生とその対策を、自分のものとして当事者意識をもって感じることができる貴重な経験となった。また、WHO本部結核対策部に所属する日本人の小野崎郁史氏から、逆に日本では再興感染症とも呼ばれ昔の病気と考



写真6 北海道大学視察団と一緒に(WHO)



写真7 WHO本部での概要説明

えられがちな結核が、世界的には現在進行形の重要な感染症であることを学ぶことができた(写真7)。

4) ジュネーブ市内フィールドワーク

研修の空き時間を利用して、ジュネーブ市内のフィールドワークを行った。ジュネーブの旧市街の街並みやジュネーブ会議が開かれた部屋(ALABAMA)、ジャン・ジャック・ルソーの生家、サンピエール大聖堂、宗教改革記念碑、ジュネーブ大学などを見学し、古くから国際政治の舞台であったジュネーブの歴史に触れることができた。また今回研修に組み込むことはできなかったが、国際連合ヨーロッパ本部(パレ・デ・ナシオン)やユニセフ・ヨーロッパ事務所などの外観を見学し、今なお国際政治の中心地でありつづけるジュネーブの国際社会における役割を改めて感じることもできた。またグランジュ公園、ジェッダー(大噴水)、レマン湖など、風光明媚なジュネーブの名所の観光も行い、途中ギリシャから来た修学旅行生との交流などをおり込みながら、ジュネーブの文化を醸成する背景となったであろう自然豊かで静謐な街の雰囲気を味わった。

4. 学生の振り返り・発表

帰国後、学生は研修の成果をパワーポイントにまとめ、翌年度となる平成27年4月16日に、1学年下の「保健医療福祉行政論」の講義時間を利用して発表を行った。発表の場となった講義科目から主としてWHO本部訪問での学びについての発表となったが、その中で、国際的な活動においては、医療だけではなく様々な分野の専門家の協力が必要なことや、多角的な視点からの考察が重要であることについての学びを伝えていた。また、WHO本部では自分の仕事場にいる事よりもカフェなどで会議や仕事をする事が多いなど、国際機関においてもインフォーマルな形のコミュニケーションが重要であることについて触れ、公的な言語である英語だけでなく、そのような

場でよく使われるフランス語やドイツ語など様々な言語の習得が、円滑なコミュニケーションを図るために必要であると感じたことを伝えていた。

5. 本研修による学生の学習効果について

1) 研修の目的達成度について

各訪問機関において、現地スタッフと交流し機関の概要を理解するだけでなく、公衆衛生看護の視点から見た各機関の役割機能についても学習することができた。本研修の目的であった、広く世界の保健活動・看護活動の実状を見聞することによる、公衆衛生看護管理に関する学生の視野の拡大と国際感覚の涵養については、前述のように多角的な視点からの考察や、インフォーマルなコミュニケーションの必要性についての意見が見られたことから、一定程度の効果があつたと考えられる。また、研修中、偶然同行することとなった北海道大学の学生との交流や、フィールドワーク中のギリシャからの修学旅行生との関わりを自主的に行うなど、訪問研修以外の場面においても積極的に国際人としての学びを得ているようであった。

2) 短期研修における学生の英語を使用したコミュニケーション能力について

鹿児島大学医学部保健学科で行われた過去の学生海外研修報告¹⁾²⁾でも論じられているように、学生の英語力の必要性については本研修においても学生の認識として同様の結果であった。特に今回の訪問先で実施されたような少人数に対する講義形式の研修の場合、ディスカッションとしてその場で意見を求められることも多く、英語力に自信がない学生においては、質問内容の理解はもちろん返答に苦慮する場面が見られていた。

ただし今回の研修では、学生の英語能力を選考基準には入れていなかったにもかかわらず、偶然高校から大学にかけてホームステイなどの英語能力向上の機会を積極的に経験してきた学生が1名おり、その学生がまず最初にディスカッションに対応することで、拙いながらも意見交換が全体として前向きに進行する場面が多く見られていた。

海外研修における学生の英語を使ったコミュニケーション能力については、数週間に及ぶホームステイを通じた学習によってコミュニケーション能力（及び英語学習意欲）が向上した報告は見られるものの³⁾、短期研修においては研修前に英語を勉強する学生も少なく⁴⁾、研修の効果としては英語学習意欲の向上が主となっているものがほとんどである⁴⁾⁵⁾。そのため、実際の短期研修の実施にあたっては、現実問題として英語能力に乏しい学生に、研修による経験を前向きに捉えさせ、学習意欲の向

上にどのようにつなげるかが重要な視点となる。

本研修の経験から、学生全員の英語能力が高くない場合であっても、最低1名の英会話の堪能な学生がいるだけで円滑なグループ・ダイナミクスが発生し、研修の効果が増大する感触を得た。鹿児島大学医学部保健学科では平成28年度入試からバカロレア入試を導入して英語能力の高い学生の入学の道を開いている。そのような学生が他の学生に対する身近なロールモデルとなり、学生全体の英語によるコミュニケーション能力獲得への意欲向上や、ひいては国際感覚の向上につながっていくと考えられ、今回のようなグループ・ダイナミクスのきっかけとして、短期海外研修などで活用されていくことが重要である。

3) 訪問先各機関の日本人スタッフとの交流について

本研修における主な訪問先機関は公的な機関であったため、例えばIFRCとWHO本部には日本赤十字社や日本政府からの出向者が常駐しており、研修のコーディネートから機関の概要説明まで日本語による対応をしていただいた。またICNにおいても、偶然2012年に日本人がICN ナース・コンサルタントに就任しており、ICNの活動のみならず、海外における看護職としての経験全般についての学生の質問に答えていただいた。

今回実施したような講義形式が主となる短期研修で、かつ学生の英語能力も高くないような状況においては、これらの日本人スタッフによるサポートは学習効果に大きく影響を与えたと思われる。英語能力向上に注目すると日本人スタッフの日本語による講義の欠点もあるが、状況に応じて積極的に取り入れていくことで、効率的な学習効果が期待できるのではないかと考えられる。また、国際社会の最前線で実際に働く看護職や医療職とふれあう経験は、国際的な情勢に対する感覚を身近なものとし、学生の国際感覚の涵養に大きく貢献するものと考えられ、この点からも積極的に交流の機会を設けるべきと思われた。

おわりに

本稿では、公衆衛生に関わる国際機関への短期視察研修における、学生の学びについて若干の考察を行った。今後も学生の海外研修の機会は増えていくと思われ、学生の英語能力に頼ることなく効果的に学習の成果を得られるような研修を企画していく必要があると考える。

引用文献

- 1) 八代利香, 松成裕子, 李笑雨: 鹿児島大学学生海外研修事業の報告 - 韓国の Chung-Ang University および保健診療所の訪問活動 - . 鹿児島大学医学部保健学科紀要 2012; 22(1): 1-6

- 2) 中尾優子, 八代利香, 津留見美里, 他: 鹿児島大学
学生海外研修事業の報告(助産コース大学院生) -
韓国での産後ケアセンター, 母乳育児支援センター
訪問とプレゼンテーション体験 - . 鹿児島大学医学
部保健学科紀要 2015 ; 25(1) : 19-24
- 3) 森久子, 鈴木寿摩: 本学看護学生における異文化体
験を通してのコミュニケーション能力と英語学習意
欲. 日本赤十字豊田看護大学紀要 2014 ; 9(1) : 71-
79
- 4) 山口善子, 寺岡貴子: 海外研修を通しての国際看護
教育 学習意欲の変化と研修満足度. 看護教育研究
学会誌 2013 ; 5(2) : 42-48
- 5) 香月毅史, 荒井淑子: 看護学生の短期海外研修にお
ける英語学習に関する意識調査. 上武大学看護学部
紀要 2009 ; 5(1) : 12-18

Report on the Kagoshima University student overseas training project in Geneva

Shimpei Kodama¹⁾, Naoko Inadome¹⁾, Miki Marutani¹⁾

1) Department of Community Health Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, Sakuragaoka 8-35-1, Kagoshima, 890- 8544 Japan

Address correspondence to Shimpei Kodama,
8-35-1, Sakuragaoka, Kagoshima City 890-8544, Japan
Tel&Fax: 099-275-6794
e-mail: kodama@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

We organized and implemented the Kagoshima University student overseas training project in Geneva, which has many international organizations for public health, to learn about public health nursing management from international point of view. We visited the International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies (IFRC), the International Council of Nurses (ICN) and the World Health Organization (WHO) headquarters and heard the international situation of public health at that point and communicated with staffs of these international organizations. We also conducted field-work in Geneva to learn about cultural background of its international character. These experiences widened the students' point of view and developed their international sensibilities. We think that participation of a student who speaks English well and communication with local Japanese staffs have good effects to student overseas training projects.

Key words: public health nursing, international exchange, IFRC, ICN, WHO